

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	専攻	対象学年	2年
講義日	令和 7 年 11 月 14 日(金)			
テーマ	地球環境とエネルギー (3)再生可能エネルギー先進国;ドイツ、デンマークの取り組み (4)日本の再生可能エネルギーの現状と課題			
講 師	和田 武(工学博士、自然エネルギー市民の会代表、元・日本環境学会会長)			
講義内容				
(1)再生可能エネルギー先進国；ドイツ、デンマークの取り組み 再生可能エネルギー普及に先進的に取り組んできたドイツとデンマークでの状況について解説する。両国は世界に先駆けて風力発電を導入し、再エネ普及を推進してきたが、その要因として早くから適切な普及政策を採用してきたことと共に、市民や地域が普及の担い手として重要な役割を果たしてきたこと、それによって多くの好影響が社会にもたらされていることを学ぶ。 その中で、演者が調査してきた様々な取り組み事例から、再生可能エネルギー普及に取り組む自治体・地域社会が豊かに自立的に発展していることを紹介する。				
(2) 日本の再生可能エネルギーの現状と課題 日本の再生可能エネルギー普及は、他国より大きく立ち遅れている。2012 年に民主党政権下で固定価格買取制度が導入され、太陽光発電を中心に普及が進み始めたが、その後、再エネ発電の普及を抑制する傾向も現れ、普及の勢いは弱まっている。その要因としてエネルギー政策と電力関連制度を分析し、問題点について論じる。 今後、気候危機防止のために再エネ 100%の持続可能な社会実現の可能性を検討し、再生可能エネルギー重視政策への転換と市民やあらゆる地域主体が再エネの生産者、供給者、消費者としての取り組みを強化することが重要であることを論じる。				
講師からのメッセージ				
演者は、市民共同発電所の普及に取り組み、固定価格買取制度の調達価格等算定委員を務めるなど、再エネ普及に関わってきました。日本の持続可能な発展のために、私たち市民が再エネ普及の主体者になることの重要性を認識していただければ幸いです。				

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	専攻	対象学年	2 年
講義日	令和 7 年 11 月 7 日(金)			
テーマ	地球環境とエネルギー (1)地球温暖化・気候危機防止とエネルギー転換 (2)世界の再生可能エネルギー最新動向			
講 師	和田 武(工学博士、自然エネルギー市民の会代表、元・日本環境学会会長)			
講義内容				
地球環境とエネルギー				
(1)地球温暖化・気候危機防止とエネルギー転換				
2024 年の世界の気温は産業革命期に比べて 1.55℃上昇し、1.5℃に抑制する国際的合意を超えた。気温上昇によって起きる現象の中で、今後の気温上昇によって地球システムが転換点に至り、不可逆的に破壊されるリスクがあり、これについて詳しく述べる。 その上で、化石燃料に依存するエネルギー利用から早急に再生可能エネルギー中心の持続可能なエネルギー利用への転換の重要性について論じる。日本における原子力利用の是非についても考察する。				
(2)世界の再生可能エネルギー最新動向				
世界では 2024 年に再生可能エネルギー（以下、再エネ）発電設備の導入量が史上最高を記録するなど、最近、再エネ普及は急増している。その要因として途上国での普及増、再エネ発電コストの低下、再エネ 100%計画を持つ国の増加、市民地域主導による普及増加等がある。1.5℃未満にするための 2030 年までの再エネを 3 倍増する可能性についても考察する。 国別の普及状況についても比較し、化石資源産出国のオーストラリアの再エネ中心社会を目指す政策への転換についても紹介する。日本は大きく立ち遅れているが、その要因について簡潔に考察する（詳細は 4 回目の講義で論じる）。				
講師からのメッセージ				
地球温暖化が急速に進行し、「待ったなし」の段階にきている。「私たちは、気候変動地獄へと向かう高速道路を、アクセルを踏んだまま走っているのです。」(国連グテーレス事務総長、2022 年)。世界も日本も真剣に対応しないと未来世代の健全な生存を脅かしかねない。再エネ 100%への転換を目指す重要性についての認識を深めてほしい。				

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2年
講義日	令和 7年 10月 17日(金)		
テーマ	民族紛争		
講 師	同志社大学政策学部教授／神戸大学法学部・法学研究科名誉教授 月村太郎		
講義内容			
現在の世界各地で起きている多くの戦争や紛争は、「民族」に深く関係しています。ロシアとウクライナの戦争、ガザをめぐるイスラエルとパレスチナ人の紛争には、多くの要因が関わっていますが、最大の原因のひとつが「民族」をめぐる問題であることは否定できません。また戦争や紛争に表面化してはなくとも、ぎくしゃくしている政治関係の根底に「民族」という問題が潜んでいることが多くあります。そうした問題と無縁に思える EU 諸国もその例外ではなく、スペインはカタロニア州の独立問題を抱え、キプロス島は南北に分断されており、我々の知っているキプロスは南のギリシャ系住民の領域、トルコ系住民の領域は北キプロス・トルコ人共和国と呼ばれ、両者間の境界には国連平和維持活動部隊が展開しています。 他方で、「民族とは何か」という素朴な問いに対して、即座に答えることができるひとは意外に少ないと思います。こうしたことを踏まえて、この講義の前半では、「民族」に関する共通のイメージを皆さんに持ってもらうことを狙いとしています。後半では、「民族紛争」の実例を紹介しながら、「民族紛争」に関する理解を深めることを狙いとしています。			
講師からのメッセージ			
今後の日本は、これまで以上に多くの「民族」が入り交じる社会になる可能性があります。「民族」とは何かについて理解を深めることは、今後の日本の国家像を考える一助となると思っています。 参考文献:拙著『民族紛争』(岩波新書、2013 年)			

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2 年
講義日	令和 7 年 6 月 18 日(水)		
テーマ	ミャンマー難民との共生を考える—ドキュメンタリー映画「OUR LIFE」制作の背景を通して		
講 師	国際ファッション専門職大学／京都大学東南アジア研究研究所 直井 里予		
講義内容			
ねらい:本講義では、講師本人が制作した難民に関するドキュメンタリー映画の参考上映とディスカッションを通し、国際協力や難民の支援活動について理解を深めます。			
内容:			
① 国際問題の根源的要因を深く考察する。(ミャンマーの少数民族問題を事例に、紛争の歴史的背景を理解する)			
② 難民キャンプにおける国際 NGO(ボランティア)の役割を理解する。			
東南アジアは、多様な民族、宗教、文化で構成されています。その多様性を共存させつつ、民族や宗教の抗争や貧困など、多くの問題も抱えています。このような多様性の中で、人々はどうのように社会で関係性を形成し、維持しているのでしょうか。また、人々の日々の生活を支える地域の諸問題を解決するには、どうすればよいのでしょうか。			
本講義では、タイ・ミャンマー国境に位置する難民キャンプで生まれ育ったミャンマー難民の少年とその家族の生きざまと心の軌跡を 10 年間に渡り描いたドキュメンタリー映画『夢の終わり—OUR LIFE 2』を通して、ミャンマー難民は、難民キャンプの変化とどのように関わりながら生き、第三国定住地でどのような社会関係を形成しているのか、また、国際 NGO 団体の活動内容を紹介しながら、難民キャンプにおける NGO の役割に関して考察します。			
さらに、2021年 2 月1日のミャンマーで発生した軍によるクーデターが、難民の帰還にどのような影響を与えたのかを考察しながら、ミャンマーの現状を難民問題の視点から議論します。			
講師からのメッセージ			
映画の上映の後は、各グループにわかれて、ディスカッションと発表を行います。日本における難民の受け入れ政策や難民支援の在り様など、皆さんと一緒に考えていければと思います。			

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2年
講義日	令和7年6月13日(金)		
テーマ	国際関係の歴史		
講 師	同志社大学政策学部教授・神戸大学法学部名誉教授 月村太郎		
講義内容			
新型コロナウイルスのパンデミックやロシアによるウクライナ侵攻など、最近の国際関係は急激に変化しているように感じられるかもしれない。しかし新型コロナと中世のペストや第一次世界大戦に伴うインフルエンザの流行、ウクライナ侵攻とふたつの世界大戦とを比較するならば、我々を取り巻く国際関係の急変も相対化できる筈である。特に、ウクライナ侵攻に際してのプーチンの言動、そして当事者であるウクライナ抜きでの停戦の動きは、1938 年のチェコスロヴァキア危機におけるヒトラーの言動、当事者抜きで英仏独伊による解決を図ったミュンヘン会議を彷彿とさせるのである。身近な個人的経験を絶対化せずに相対化することは、我々に最も必要とされる姿勢のひとつである。その為にも歴史に学んでいきたい。 本講義においては、こうした現在の政治的事件の相対化を試みた後、19 世紀以降、最も大きな変動を経験した地域である「バルカン」を事例に、近代以降の我々がどのような歴史を刻んできたかを紹介する。「バルカン」は、ロシアが進出を試みてきた地域であり、それが第一次世界大戦までの最大の国際問題である「東方問題」の背景にある。ロシアが西方に進出する動きはウクライナ侵攻にも共通することであり、「東方問題」は現在も重大な事案として存在し続けているのである。こうした歴史を学ぶことで、ユーラシアの東端に位置する島国に住んでいるいまの我々を相対化することを試みて欲しい。			
講師からのメッセージ			
講義において浮かんだ疑問や感想はそのままにせずに、講義の終わりに設ける時間帯に講師にぶつけて下さい。			

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2年
講義日	令和7年6月12日(木)		
テーマ	国際関係の現在		
講 師	同志社大学政策学部教授・神戸大学法学部名誉教授 月村太郎		
講義内容			
冷戦終了以降の現代の国際関係の傾向は、グローバル化として一言で纏めることができると思われてきた。グローバル化の特徴に関する定義は論者によって多様であるが、少なくとも「ヒト・モノ・カネ・チエ」の越境の増大であることは、殆どの論者に共通している。その最たる例が、新型コロナウイルスのパンデミックであった。しかし、そうした定義に則るならば、近代以降の歴史は常にグローバル化の流れが底流にあったと言うこともできるのである。更に、他方でグローバル化に対する反作用として、政治的主権による「反撃」が目立つところでもある。その端的な例が、トランプ米大統領による関税ディールであり、プーチン露大統領によるウクライナ侵攻である。この講義では、そうしたグローバル化をめぐる国際的なせめぎ合いについて、どのような現象が起きているかを紹介したい。			
講師からのメッセージ			
講義において浮かんだ疑問や感想はそのままにせず、講義の終わりに設ける時間帯に講師にぶつけて下さい。			

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース	対象学年	2 年
講義日	令和 7 年 5月 15 日(木)		
テーマ	アセアンを知る		
講 師	太田和宏 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授		
講義内容			
多様性を含みながら一体性を追求する東南アジア・アセアンの現代的意義とその背景について考えてみたいと思います。 東南アジア地域は、言語、民族、宗教、文化、政治経済体制など、どの観点から見ても多様で複雑な要素を持っています。しかしそれらは別々に存在するのではなく、お互いに関連し影響をあたえあい、融合をしながら今日に至っています。そして現在、10の国家があつまり「アセアン共同体」を形成して、「国家」という単位を超えた協力関係をより一層強めつつあります。 グローバル化が叫ばれる中、東南アジア地域は、経済的にも外交的にもかつてない程重要な役割を果たしつつあります。 こうしたアセアンについて、文化的歴史的背景を概観しつつ、現在のグローバル社会の中で果たす役割についてみてゆきたいと思います。			
講師からのメッセージ			
今後、日本が関係を一層強めていく東南アジアへの理解が少しでも深まればうれしく思います。			

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース 専攻	対象学年	2 年
講義日	令和 7 年 4 月 17 日 (木)		
テーマ	校外学習 「神戸外国人居留地と神戸港」		
講 師	国際関係学博士 楠本 利夫 (元芦屋大学教授、シニアルネサンス研究会理事長)		
講義内容			
神戸は 1868 年1月 1 日に開港した。横浜、長崎、函館に 9 年遅れの開港である。開港した神戸に、各国は領事館を開き、世界中から来神した貿易商が商館を構えた。日本人も国内各地からチャンスを求めて神戸に移住してきた。神戸開港の翌 1869 年、スエズ運河が開通し、極東と欧州の間の海上距離が大幅に短縮され、東西の人流、物流が盛んになり、神戸は横浜とともにわが国の「世界への窓口」となった。開港は国際都市神戸の原点である。			
現地ウオークコース			
市庁舎 24 階展望ロビー(神戸港遠望) → マラソン発祥の地記念碑 → 東遊園地 → 加納宗七像 → 震災と復興モニュメント → 花時計 → モラエス像 → シム記念碑 → 居留地 → 旧「運上所」跡(神戸開港宣言・「神戸事件」で維新政府初外交・神戸税関発祥地記念碑) → 海岸通 → 旧英国領事館(9 番)→ 旧ドイツ領事館(8 番)→ 「15・16 番館敷地境界壁」 → 「15 番館」 → 宮城道雄生誕地碑 → 旧「生田馬場道」(遠望) → 神戸事発生地記念碑(三宮神社) → 鯉川筋(南京町・栄町・初代米国領事館跡(郵船ビル)等遠望) → 臨港鉄道 線路敷跡(国道 2 号線) → 海軍営之碑→メリケン地蔵→メリケンパーク(神戸港震災メモリアルパーク) → 昭和天皇歌碑 → 神戸海外移住者像 → かもめりあ(観光船乗船場) → 神戸港海上遊覧 → 明治天皇御用邸跡記念碑 → 鈴木商店本店跡碑→「兵庫県里程元標」 → 西関門跡碑(解散)			
講師からのメッセージ			
国際都市の原点である神戸外国人居留地と神戸港を実地見学し、開港が神戸をどのように変えてきたのかを学ぶ。			

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース 専攻	対象学年	2 年
講義日	令和 7 年 4 月 11 日 (金)		
テーマ	神戸外国人居留地物語		
講 師	国際関係学博士 楠本 利夫 (元芦屋大学教授、シニアルネサンス研究会理事長)		
講義内容			
神戸は 1868 年1月 1 日に開港した。横浜、長崎、函館に 9 年遅れの開港である。 開港した神戸に、各国は領事館を開き、世界中の貿易商が商館を構えた。日本人も国内各地からチャンスを求めて神戸に移住してきた。神戸開港の翌 1869 年、スエズ運河が開通し、極東と欧州の間の海上距離が大幅に短縮され、東西の人流、物流が盛んになり、神戸は横浜とともにわが国の「世界への窓口」となった。開港は国際都市神戸の原点である。 1. 日本開国と神戸開港 2. 神戸開港と神戸外国人居留地 3. 神戸開港と神戸の都市アイデンティティ 4. 現地案内コースと訪問先 市庁舎 24 階→外国人居留地→メリケンパーク(震災メモリアルパーク、海外移住者像) →神戸港(遊覧船)→明治天皇御用邸跡→鈴木商店本店跡→西関門跡 コース詳細:別紙のとおり (参考文献) ・楠本利夫『増補 国際都市神戸の系譜』公人の友社 2007 年 ・楠本利夫『移住坂～神戸海外移住史案内～』セルポート 2004 年 ・大国正美・楠本利夫『明治の商店～開港神戸のにぎわい～』神戸新聞総合出版センター 2017 年			
講師からのメッセージ			
我が国の県庁所在都市は城下町が圧倒的に多く、その都市の象徴は城であるが、神戸の象徴は旧外国人居留地と神戸港である。1868 年の開港が神戸の運命を国際貿易都市と決めた。神戸外国人居留地とはどのようなところであったのか、神戸開港が神戸をどのように変えたのかを考える。			

神戸市シルバーカレッジ 講義概要(シラバス)

コース 専 攻	国際交流・協力コース 専攻	対象学年	2 年
講義日	令和 7 年 4 月 11 日 (金)		
テーマ	小泉八雲の神戸		
講 師	国際関係学博士 楠本 利夫 (元芦屋大学教授、シニアルネサンス研究会理事長)		
講義内容			
明治 23 年 4 月、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、バンクーバーから海路、横浜に着いた。8 月下旬、ハーンは、姫路から人力車で中国山地を越え、松江尋常中学校教師として赴任した。 明治 24 年 11 月、ハーンは、熊本第五高等中学に英語教師として赴任した。 明治 27 年 10 月、ハーンは神戸の英字紙「神戸クロニクル」の論説記者として神戸に移住した。ハーンは、毎日、坂道を徒歩で下って新聞社に通い、1 本の論説を書きあげて帰宅した。12 月、過労のため眼疾が悪化したハーンは、医師の指示で仕事を休み、自宅で療養した。ハーンは、神戸外国人居留地の街並みの軽薄さと欧米人商人の傲慢な態度を嫌い、欧米人との交流を避けた。 明治 29 年 2 月、ハーンは神戸で小泉セツと正式に結婚し、日本人小泉八雲になった。 ハーンの神戸に関するエッセイとして、日清戦争帰還兵の市民歓迎行事、和田岬沖「軍艦松島」見学会、和田岬の遊園地・和楽園、神戸外国人居留地、コレラ蔓延に苦しむ市民等がある。			
講師からのメッセージ			
ハーンと言えば松江を想起するが、ハーンの松江滞在は 1 年 2 か月余であり、次の熊本(3 年)、神戸(2 年)、東京(8 年)に比べると、一番短い。ハーンが神戸に来た目的、ハーンが見た神戸、ハーンのドイツ人眼科医が見た神戸時代のハーンの姿などを紹介する。 (参考文献) ・楠本利夫「ラフカディオ ハーンの神戸～ハーンはなぜ神戸では知られていなかったのか～」(『へるん』八雲会 第55号 2018 年) ・楠本利夫「ラフカディオ ハーン神戸時代の眼科医～修法が原外国人墓地に眠るドイツ人眼科医」(神戸外国人居留地研究会編『近代神戸の群像』神戸新聞総合出版センター2023 年1月)			